

院外茶話

vol.84 平成24年5月1日

周囲と見分ける色
周囲に溶け込む色
伝統を守る色
気持ちを新たに
する色

色 いろいろ

インフルエンザに始まって、花粉症の季節が終わるまで、街はマスクだらけ。子供も年寄りもみんな白いマスク。

派手なお姉さんが、豹柄で着飾ってみてもマスクは白。白という思い込みがあったので、初めて黄色いマスクを見た時は衝撃的だった。なにせ、顔の中心が黄色いからだ。

そう言えば医療現場も白衣とは名ばかりで、実際には水色やピンク、派手なところでは花柄の看護師が歩いている。今どき白い白衣なんか着ているのは、医者だけではないか。

以前は押しなべて白かったパンツですら、色物が出回っているに違いない。ただし、人様のパンツは確認できないから、これは想像に過ぎない。

色の思い込みとは他にもあって、初めて青い柔道着を目にした時は、違和感をもつと同時に、なぜか新鮮味があった。日本人には思いつかない発想で、時代の変遷を感じたけれど、後に聞けばこのカラー柔道着の採用をめぐる、一悶着があった。

柔道とはその名の通り「道」である。日本人の場合、気持ちをこめて修行をする時の着衣はどうしても白でなくてはならない。白無垢も白装束も、とにかく白なのである。あの、三島由紀夫も男児の下着は白と言っていた。

その柔道着は汗を吸うので、度々洗濯をするけれど、帯を洗うのは何回かに1回。長年修行を積んだ人の帯は、だんだん汚れて黒ずんでくるので、黒帯と言われるようになった。

そんな文化を顧みず、白い柔道着に色を付けたがったのはヨーロッパ勢で、主な理由は判定ミスを防ぐことや、観客にわかりやすいという

ものだった。

当然、日本は反対をしたけれど、「道」だの「無心」だのと言っても、合理的な西欧人には通じない。結局のところ、多勢に無勢。押し切られる形で、1997年の国際試合から、カラーの柔道着が採用されることになった。

日本文化は世界のものとなったが、同時に柔道は日本の手を離れて、「道」から「スポーツ」に変貌した。



確かに色がついた方がわかりやすいが。

今は慣れてしまったけれど、こうして柔道着に色がついた経緯を辿ってみれば、若干の挫折感を禁じ得ない。

ヨーロッパ勢の主張で、柔道ばかりが色付けをされたけれど、ウィンブルドン大会のテニスウェアは、未だに練習着も白と決まっているじゃないか。

では、襟付きのシャツしか許されないほど、マナーを重んじるゴルフの場合はどうか。ウェアはともかく、20年くらい前から白いボールに、いつの間にかカラーボールが混ざりようになった。やかましいことを言う人がいそうな気がしたけれど、意外に、いちゃもんがつかなかった。もっとも、これは私が知らないだけかもしれない。

カラーボールのメリットは二つ。まず、芝生の中で見つけやすくなる。遠くからでも、自分と他人のボールを見分けることができる。誤って人のボールを打ってしまうこともない。

ではどんな色がよいか。1年を通して緑と茶色は具合が悪い。周囲に溶け込まない色なら何でもよくて、金色も銀色もあるけれど、背景を考えれば多分オレンジ、ピンクが目立つだろう。蛍光色ならもっといい。ただし、色覚障害の人にとってはオレンジと緑の区別は、つきにくいかもしれない。

全く逆さまの理由で、バンドエイドは目立たないように肌色に作られた。アメリカでは黒人用に、黒いバンドエイドがあると聞いたけれど、何とすばらしいアイデアだろう。

バンドエイドの場合は肌色、軍服は迷彩色を使って保護色にするが、柔道着やカラーボールは、逆の発想だった。

いろいろ都合はあるだろうけれど、最初に戻ってマスクは何色がよいか。肌色にすれば目立たないけれど、こうすると口がなくなってしまって気味が悪い。マスクの場合目立つ必要もないし、隠れる理由もない。

強いて言うなら、人と違った色を選ぶ楽しみはあるが、それも大した理由ではない。何色でもいいのならば、汚れを見つけるためには、やはり白がいいだろう。

こうして結局、白に落ち着くところが日本人なのであります。

桜色

東京に住んでいると雪をめったに見ないから、冬の色を感じない。

それでもこの季節を過ぎれば空が霞んで、梅が咲いて、一雨毎に寒さが和らいで、春の仕上げは桜。開花が始まると、あたりは劇的な勢いで桜色に染まる。



我が家の近くの桜並木。ガスコンロを持ち出して、鍋をつつくつわものもいました。

花見は日本の一大行事になって、弁当ならば花びら大根をあしらった花見弁当。菓子屋に行けば桜餅に花見団子。企業や学校の新年度と重なって、心踊る季節だけれど、同時にたちまち散ってゆく寂しさも分かっているの、一所懸命に花を見る。



三色の花見団子。白は雪で緑はヨモギを表す。冬から夏へ橋渡しをするのが桜色。

もともと花見は奈良時代の貴族が始めた遊びで、吉野の花を眺めて和歌を詠んだ。これが延々と続いて今に至る。和歌は宴会に変わったけど、日本中が桜の下に集まって、ひと時の花を愛でる。この宴会も短期間だからいいけれど、もし開花が1か月も続いたら、みんなアル中になるだろう。

私も毎年花見に行く。花見の酒も好きだけれど、どうも酒の匂いが好きになれない。人ごみも苦手なので、名所を避けて穴場を探す。

その穴場はどこにでもあって、近所の公園には見事な桜が咲く。隣のコンビニで弁当とビールを買って、木の下に陣を張れば、桜はほとんど独り占め。

花見でなくても桜の季節は、上を向いてこの公園の散歩をする。そう言えば、上を向いて歩くと幸福になれると聞いたことがある。

妻の実家が尾道にあって、山頂の千光寺に向いた時には山全体が桜。子供用の遊園地に行っても、桜でいっぱい。

何と地上数メートルの桜の枝を切ってトンネルを作り、この中をモノレールが走っていた。乗客は私一人。モノレールが桜のトンネルをくぐって進むと、下で遊ぶ子供たちの視線を感じる。

これが風流かどうか別として、実に贅沢な桜見物をしたが再び訪れたおり、このモノレールはなくなっていた。